山形県生涯学習センターだより

2020.3 Vol.18

生涯学習やまがた

CONTENTS

❷ 特集
地方創生と生涯学習・社会教育（廣瀬隆人氏×齋藤彰氏×小形崇洋氏）
～地域の実際と課題から明日の担い手育成を考える～

❻ たからびと⑧
蛯原紘子さん（小国町）

❼ 事業報告
地域学交流集会・遊学館ブックス

❽ Information
山形県生涯学習センター助成制度のご案内・遊学館ブックス最新刊好評発売中・遊学館からのお知らせ

学びの窓 / 遊学館

作家トークショー

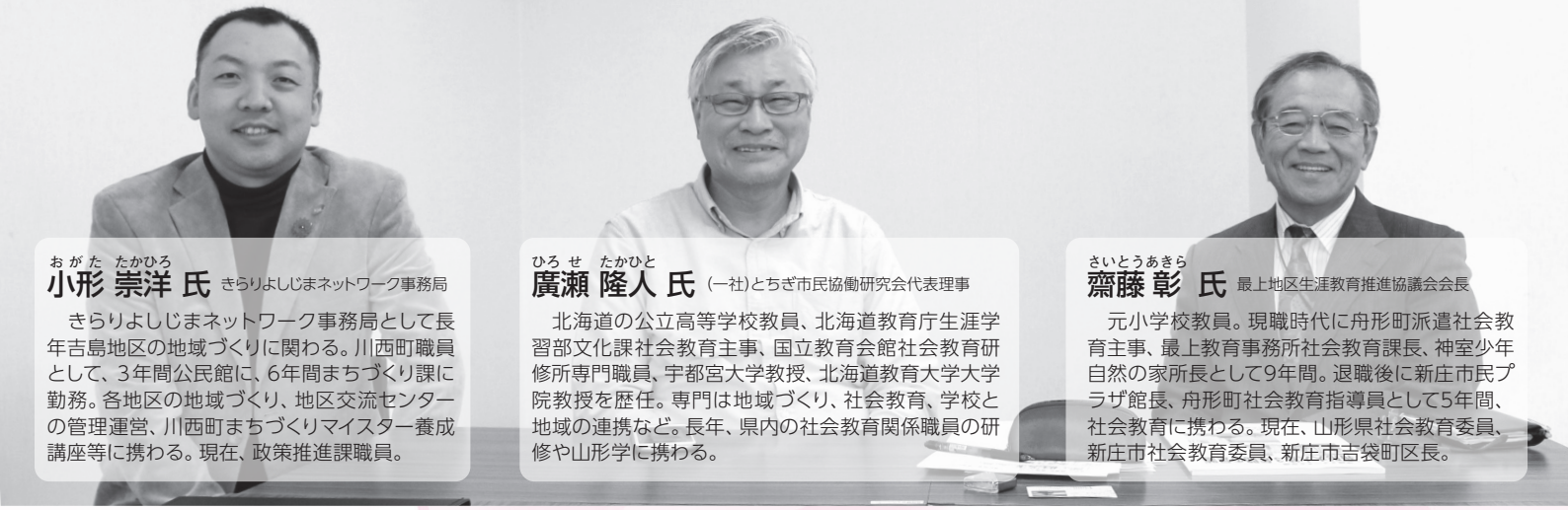
県立図書館リニューアルオープンにあわせ、山形県生涯学習センターと山形小説家・ライター講座のコラボ企画、森見登美彦&深緑野分トークショーが2月8日に開催。今話題の作家初共演に、県内外のファンがときめかれたことでしょう。館内では、たよれる図書館が充実の関連展示でもてなし、作家とファンが直接つながるサイン会も。空間も機能も蔵書もひろがった新県立図書館に、県公文書センターと大学コンソーシアムやまがた、カフェレストランイルブルも加わり、遊学館はより多彩な複合施設として学びの魅力を発信します！※新県立図書館の基本コンセプトも「ときめく・たよれる・つながる・ひろがる図書館」です！是非ご来館ください！

特集

地方創生と生涯学習・社会教育

～地域の実際と課題から明日の担い手育成を考える～

地方創生を実現するため「地域づくりの担い手育成」にいかに取り組むべきか？地域の実際と課題から今後の担い手育成を考えるべく、廣瀬隆人氏 × 齋藤彰氏 × 小形崇洋氏より語っていただきました。



小形 崇洋（おがた たかひろ） 氏 きらりよしじまネットワーク事務局

きらりよしじまネットワーク事務局として長年吉島地区の地域づくりに関わる。川西町職員として、3年間公民館に、6年間まちづくり課に勤務。各地区の地域づくり、地区交流センターの管理運営、川西町まちづくりマイスター養成講座等に携わる。現在、政策推進課職員。

廣瀬（ひろせ） 隆人（たかひと） 氏 (一社)とちぎ市民協働研究会代表理事

北海道の公立高等学校教員、北海道教育庁生涯学習部文化課社会教育主事、国立教育会館社会教育研修所専門職員、宇都宮大学教授、北海道教育大学大学院教授を歴任。専門は地域づくり、社会教育、学校と地域の連携など。長年、県内の社会教育関係職員の研修や山形学に携わる。

齋藤（さいとう） 彰（あきら） 氏 最上地区生涯教育推進協議会会長

元小学校教員。現職時代に舟形町派遣社会教育主事、最上教育事務所社会教育課長、神室少年自然の家所長として9年間。退職後に新庄市民プラザ館長、舟形町社会教育指導員として5年間、社会教育に携わる。現在、山形県社会教育委員、新庄市社会教育委員、新庄市吉袋町区長。

地域を見る目を育む

廣瀬：「地域づくりの担い手育成」は文脈や語る人によって多様な意味を持つ言葉です。今回はお二人の活動から今後の担い手育成の具体的な方策について考えていきたいと思います。

小形：川西町では「川西町まちづくりマイスター養成講座」を行っています。公民館が交流センターとなり公設民営化する際の課題が、組織や事業を運営する人がいないことでした。行政としてそれを補うため平成23年に始まりました。各地区でも何かしらの肩書がないと受け入れにくい部分があり、町で認定して、各地区の事務局に入ってもらえるようにしたわけです。各交流センターの推薦による受講が基本で、これまで100名が認定を受け各地区で活躍しています。

廣瀬：注目すべきは育てた100人の**活動の場が用意されている**ということ。これまで生涯学習推進行政では「学習成果の活用」と言いながら、活用の場には無関心で、あとは自分で探せというような状況でしたからね。

小形：講座内容は、聞き方や話し方といった人がつながるための基礎的なこと。実際の受講者は年代もスキルも人それぞれですが、最終的には各地区に戻った時に、じいちゃんばあちゃんの会話に入ってじっくり聞けることが大事だろうと思っています。

廣瀬：そうですね。担い手に必要なことは、**手法よりも感覚**。ばあちゃんの愚痴を聞いて、主婦の煮物の味付けの苦労を聞いて、「ばあちゃんを講師にした煮物の講座」をしようという感覚。これこそがコーディネートですよね。たくさんの無駄話や愚痴の中に、学習ニーズが内在していて、じっくりと耳を傾けていないとわからないもの。齋藤さん、いかがでしょう。

齋藤：私が中心的に関わったことに、例えば新庄市民プラザ館長時代の「大人のための新庄学」があります。桐野夏生さんの小説『ポリティコン』が新庄郊外の架空の村を舞台にしていて、主人公とヒロインの出会う場所が新庄市民プラザでした。そこで桐野さんへ講演を依頼すると同時に、新庄を知り主体的な生き方をしていこうという講座を6回しました。それから、舟形町教育委員会の社会教育指導員時代には、舟形町を見つめ直しどう生きるかを考えようと「舟形大人塾」をしました。町長や教育長にも登壇してもらい、講演やディスカッション、視察を盛り込んでいて、今も続いています。

廣瀬：「大人のための新庄学」は、作家講演会で終わらせず連続講座にしたことが注目されます。**地域に目を向け**

川西町まちづくりマイスターまでの6つのステップ！

- ステップ1　聞く話すコツを学ぶ！
- ステップ2　町を数字で分析！
- ステップ3　町の資源を学ぶ！
- ステップ4　チームで課題解決の
- ステップ5　方法や企画化を学ぶ！
- ステップ6　課題解決の企画発表！

若者の出番づくりと、地区の枠を越えた交流を通じて、楽しみながら地域力向上を図る!!

るきっかけはいろいろありますよね。齋藤さんは小説のモチーフを契機に地域に目を向けてもらおうとした。

地域づくりはしばしば先進事例から学ぼうとしますが、地域性や歴史が異なる地域の展開例を安直に参考にはできません。私は先進事例よりもその地域で何をしてきたかというふりかえりが必要だと考えています。地域の歴史、民俗、人物、文化などの先人事例にこそ地域づくりのヒントがある。大人の学びの特質の一つは、このような過去の経験のふりかえりを基調とする学びなのかもしれません。やはり基本は成人教育ですね。

齋藤：先輩に「**社会教育の本質は大人の学び**」と教えられまして、それを実直に守っています（笑）。

廣瀬：地域づくりの担い手育成というと、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下「総合戦略」）と絡んで地域の子ども達をどうするかが取り沙汰されています。子ども達へはどんなアプローチがありますか。

齋藤：私はＹＹボランティア（以下「Ｙボラ」）※に関わってきました。今、高校でも様々なボランティア学習をしていますが、Ｙボラは、地域の公民館等を拠点に様々な学校の高校生が集まり自主的に行う活動です。舟形町の「ふなっ子」の高校生は、自分達で企画・運営するからこそ大きな喜びや楽しさを感じ取り責任感と充実感を得られると言っています。

廣瀬：**山形県と言えばＹボラ、社会教育で始まったんですね。**学校教育でも、将来、自主的にボランティアや地域活動に参加するためのスキルや経験を蓄積するなど、ボランティア学習を通じて担い手育成を進めていました。

齋藤：ええ。金山町にあったＹボラは解体されましたが、３年前に金山高校の生徒会を中心にボランティアサークルができ、参加した生徒が金山町職員になり、公民館に勤務しています。公民館の中に「ＳＵＧＩ☆スターズ」という高校生のサークルを作って活発に活動しています。新庄市の「しずく」というサークルの卒業生が青年のサークルを作って活動し、３人ほど新庄市職員になっています。地域のボランティアを通して、地域の問題に気づき、ここに残ろうという気持ちも芽生えるのだと思います。ですから**Ｙボラの伝統は守る**べきだと思っています。

廣瀬：おっしゃられたことは総合戦略の本質をついています。学校を核とした地域づくりのねらいは、**地域を支える青年を育てること、子どもが大人になり、地域で生きることを選択できるようにすること**です。**高校生が地域の人たちとつながり**、自分達で考え行動することで**自主性・自発性**を身につけ、地域づくりの担い手となっていくのですね。小形さんいかがですか。

小形：川西町吉島地区では、きらりよしじまネットワーク（以下「きらり」）という地区全戸加入のＮＰＯ組織で様々な活動を行っていますが、メインの活動の一つは、私が公民館職員だった平成13年から続く「わんぱくキッズスクール」です。もともと町が子どもを集めてどこかに連れていく活動でしたが、地元で何かできないかと考えました。例えば働く車を見せることなど吉島地区の人が吉島地区でできることを集めてみたら、子どもが楽しんでくれた。最初は数人のスタッフでしたが、吉島地区の農業をもっと伝えようなどと活動を広げていくうち、手伝ってくれる方も増えて、子ども達に人気の活動となりました。実は、今のきらりの主なメンバーがこの活動を通して集まってきた経緯もあります。**小学生と大人をつなぐ、大人同士をつなぐ**大事な活動となっています。

廣瀬：子どもの育成を通じて、地域の大人のつながりを強化する。地域づくりとは、このように知人や友人を増やし、友人との絆をより強くする営みですね。そして、子ども達に、地域で大人が何をしているのか目に焼き付けてもらう。子どもが親と先生だけでなく、様々な地域の大人と出会うことで、担い手に育っていくのでしょう。

担い手を育む仕組み

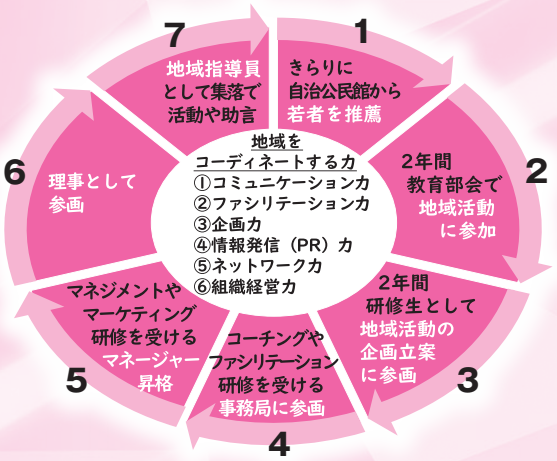
小形：ええ。さらにきらりでは、**担い手を育成するサイクル**をつくっています。最初のステップは、**地域に関わること**。毎年、自治公民館の推薦で20人ほどの若手が、きらりでスタッフとし

サタデーナイトセミナー **大人のための新庄学**
～新庄この風土の中でどう生きるか～

第１回	新庄から日本社会の現状を考える	作家講演会
第2回	地域社会の変貌と文化 変わるものと変わらないもの	講義
第3回	新庄市の昨日・今日・明日 俺にも言わせろ！ 各地の取り組みから学ぶ	パネルディスカッション
第4回	先進地視察 先進地から学ぶ	視察・講義
第5回	生きがいを求めて 映画視聴と話し合い	フィルムフォーラム
第6回	新庄市の将来ビジョン 新庄市の進むべき方向性とその道筋をさぐる	市長・教育長公開討論会

※「山形ヤング（Yamagata Young）ボランティア」（地域青少年ボランティア活動）のこと。中・高校生を中心とした青少年が学校の枠を超えて、公民館等を活動拠点とし、地域で行うボランティア活動。昭和 50 年代に始まり県内各地へと広がり、他県にはあまり例を見ないことから「山形方式」と呼ばれる。

組織継続にむけた人材確保・育成サイクル



て学び地域に戻り、リーダーに育っていく。一方、毎年数名がきらりに残り、次のステップに進む。このサイクルで、きらりには35名ほど非常勤スタッフがいます。年間55ほどの事業があり、常勤スタッフのほかに非常勤スタッフや地域の人を必ず巻き込んだ運営を心がけています。例えば、小学校を会場にした高齢者向け事業、中学生や青年層が講師や手伝いの小学生向け事業、地域の高齢者に様々なことを教えてもらう学童保育などです。

廣瀬：地域内で循環する学びが展開されていますね。事業に**多くの人を巻き込む**。例えば、できるだけ人に迷惑を掛けて進めること。実は迷惑ではなくて、人と人とを関わらせて**つながる機会を増やしている**ということですね。

小形：はい。ただ入り口の若手を育てる形は見えてきているんですが、各世代で役割を担うリーダー達が5年後もこれでよいのか。**新しい人材も入れなければ**いけないのではないか。あるいは、地区の活動に全然関わらない人も当然いて、やはり巻き込んでいかなければと悩んでいるところです。

廣瀬：新しい人を巻き込むには、地域おこし協力隊をはじめとする、県外から来た**よそ者を巻き込む**方法があります。彼らも地域で必死に知り合いをつくろうとしているし、よそ者だからこそ地域が面白いと思えることもある。よそ者の目をもっと活用すべきです。それから、地域活動に関わって来なかった人を巻き込むには、**地域活動の無関心層**とネガティブに捉えず、きっとすごい**資源の持ち主だとポジティブに捉えて**リサーチする。そして、その人の経験や知識を地域活動の中で学ばせてもらう。地域活動に無関心でも、専門や趣味を語りたい人はいます。あるいは、変わった趣味の講座を企画して5人集まれば開催するとか、そのくらいの気持ちで新しい人を巻き込むことも必要。**趣味や教養には地域とつながるきっかけ**やヒントが隠されています。齋藤さんの地区はいかがですか？

齋藤：私の住む新庄市吉袋町（約百戸）では、33年前に町内の融和と活性化を目指して「吉袋成年会」を結成しました。約40名の会員でスタートし、現在は二世会員も入ってきて、世代交代しつつあります。春の花見、夏の祭り、秋の芋煮、冬のおさいどの4事業が中心です。当初町内に公民館がなく、活動のために費用分担して自治公民館も作りました。そこで行事に併せて実行委員会を開いています。

廣瀬：春夏秋冬の行事のために毎月のように集まりを持つ。**季節の行事**こそが、人をつなぎ担い手を育てているのですね。地域の世代交代が円滑に進んでいくのは、「**何をやるか？**」**ではなく「どうやるか？**」を話し合うことにあるのではないでしょうか。やるかやらないかの議論ではなく、地域の行事をどうやるかという議論をすることで、次はお前たちの番「次は我々がやらなくちゃ」につながっていく。

齋藤：ええ。例えば、長年やっていると同じ盆踊りでよいのかとなる。数年前に町内歌「ああよしぶくろ」をつくり振り付けもしました。盆踊りの合間に町内の吹奏楽部の中学生に演奏してもらってもいます。それから、10年前に老人クラブが解散しましたが、私たちも高齢者となり、絆づくりのため「吉袋サロン」を立ち上げました。月1回の集まりで、8月は夏休みの小中学生やYボラの高校生との交流。9月は高校生が私の家の窯でピザを焼いてふるまうといった、高齢者と子ども達の異世代間交流もしています。町内の耕作放棄地を活用する畑の会もできました。このように成年会を通して**あまり面識のなかった人たちが顔見知り**になって町内の活動が広がり活性化してきています。

廣瀬：意図的に子ども達と地域、あるいは高齢者をつないでいる。人を育てる一つの契機がそこにできるのです。私たちは戦略として社会教育事業の講座などを通して担い手を育成しようとしてきました。でも、地域の行事の中で、若い人は地域の人を知り、地域の文化を学び、**実践の積み重ねの中で担い手になっていく、担い手であることに気づいていく**のだと感じました。

担い手を育む風土

小形：確かに、吉島地区でも**戦略的に人を育ててきたこと以外の部分でも効果**が見えてきています。例えば、小学生からきらりに関わってきた子ども達が、進学や就職を経て地元に戻ってきて「小形君がいるから僕も関わりたい」と事務局に入ってきてくれる。いずれは自分や先輩のようにと、同世代や後輩も意識して見てくれていると感じます。それから、高校生ボランティアで関わった子が、卒業したらきらりに来る理由が無くなったと言うので、ボランティアができる青年団的な団体「ボランティア友’s Ｑｏｏ Ｌｏｖｅ（ユースクラブ）」をつくりました。メンバーは60人、好きな時しか集まりませんが、地域の人もよく見ていてくれて、「お前ら青いTシャツ着て好きなことやってんな、孫帰ってきたからはめてくれ」と声を掛けてくれたりします。それから、実は吉島地区には伝統文化がなかったんですが、先輩から「昔の祭りは和太鼓で賑わっていた。太鼓を準備するから賑わいを作れ。」と提案を受け、自分達の世代で創作和太鼓を始め、子ども達も巻き込んだ活動にして、祭りで披露しています。個人的にも、**人と人をつなぐ**ことを意識して、次のステップも考えながら活動しているところです。

廣瀬：子ども達が成長して、都市に出ても地元に戻ってくるようになったということですが、実はわずかながらそういう流れが見られる。様々な要因の一つが、地元に通いなれた場所がある、世話になったおじさんがいる、心配してくれるおばさんがいる、丸ごと受け入れてもらえるという絶対的な肯定感。和太鼓の話もありましたが、実は**郷土芸能や民俗芸能などの伝統文化を伝える仕組みが**、子どもの心に「地域」を刻み込み「**地元**」**を意識させる**ことがわかってきています。地域文化は関わる人の存在を肯定するものでもあるのです。**そこに存在していて良いのだという地域における肯定感こそが、人を地域に戻すエネルギー**なのかもしれません。先日、私が関わる日光市の大沢青年団に新しく30代のメンバーが加わったんです。「そろそろ地元のことやんなきゃ、まずいかなと思った」と。養成も育成もされた訳でもないのにこの言葉、小学生からずっと地元でいろいろな行事を見て参加してきた経験から自覚が生まれている。講座やセミナーだけでなく、地域の行事を丁寧に継続することも必要だということ。そういう風土を培う。

齋藤：ええ。今、吉袋に引っ越してきた人に「ここさ来てよかったや～」と言われるような町内になってきています。町内や成年会のあり方といった**風土が人を育てている**、それが人に伝わっていることを嬉しく感じます。地域づくり、あるいは担い手を育てるという時には、段階があると思うのです。まずは**俺たちの地域だという意識を持つ**こと。その中でこういう問題があるから、何とかさんなんねべという意識が出てくる。そしてもっとよくすっぺ、一人で出来ないから、**皆ですんなんねな。おもしぇからすんのよ**って。そして、マンネリにならないように新しいアイディアを入れて、楽しさを追求していく。楽しければ、またすっかという意識になる。そのような学習を繰り返すことによって、地域づくりが深まっていくと考えています。

廣瀬：担い手づくりの肝を解説していただきました。お二人の活動から二つのことを感じました。一つは、地域づくりの担い手育成は、高校生や青年に意識が向いているけれど、小中学生の段階で地域の人とつながる仕組みをつくっておかなければならない。小中学生の頃に地域の人と知人友人になることが、地域に戻り担い手となることに影響を与えている可能性が強い。だから、社会教育だけでなく学校教育でも、**子ども達が地域の人と関わる量を増やしていく**ことを意識する必要があること。

一つは、どうやら地域づくりの担い手は講座やセミナーだけで育成されるものではない。地域の人を活かす仕組みやつながり、春夏秋冬の地域行事を丁寧に展開するなど**地域の風土によって担い手が育てられている**。地域ごとに違う側面を持ち、容易に一般化できるものではない。あるのはその地域ごとの工夫である。地域の行事などの様々な活動は知人友人を増やすためで、知人友人ができなければ課題解決もできないし主体形成もできない。困っている知人友人を助けたい気持ちがあって課題解決に向かうということ。「**地域づくり**」**は「知人や友人を増やすこと**」だと改めて確信しました。

―「地域づくりの担い手育成」の多様性を改めて感じるとともに、担い手を育む仕掛けや風土について様々なアイディアをお聞きできました。ありがとうございました。―

8

あなた
やまがた
たからびと

interview

蛯原（えびはら） 紘子（ひろこ）さん マタギ（小国町）

県内で自ら学び続け、いきいきと活躍している方を「たからびと」として、インタビュー形式でご紹介します。今回は、小国町職員とマタギを両立しながら、狩猟文化の体験活動やトークイベントなどPR活動にも尽力する蛯原紘子さんにお話を伺います。

―始めたきっかけ、現在の活動は？

熊本県の出身ですが、東北芸術工科大学で日本画を学びたくて山形に来ました。動物の絵ばかり描いていましたが、表現より観察に興味があることに気づき、絵が描けなくなりました。そんな時、狩猟文化研究者の田口洋美教授に出会い、小国町の五味沢班というマタギ集団の熊狩りに誘っていただきました。初めて同行した時のカルチャーショックは今も覚えています。マタギの山歩きの身体能力の凄さ、山の景色から得る情報量の違い、何十年も積み重ねられてきた経験値、自然の恵みを子々孫々まで守り伝えようとするルールや価値観。同じ人間なのになぜこんなにも違うのかと憧れました。大学時代から熊狩りに同行し続け、大学院卒業前に五味沢班の仲間として認めてもらいました。熊だけでなく山菜を採ったりきのこを採ったり、山そのものが生活の一部であることに魅力を感じ、小国町に暮らしたいと町職員になりマタギの活動も続けています。他にも、五味沢地区の人たちが宿泊施設「りふれ」に冬のお客さんを呼び込もうと始めた雪の学校や、狩猟に興味があるけれどきっかけがない方向けの東京でのトークイベントなどもお手伝いしながら、町の魅力やマタギの魅力をPRしています。

5月に出産を控える紘子さん、地域のおじいちゃんおばあちゃん達にお世話になりながら、たくましく子どもを育てていきたいとのこと

―活動の魅力や大事にしたいことは？

技術や考え方を受け継いでいくのはやはり人。私はそういう人との出会いがあったからこそ今があるので、何をするにも人を大事にして生きていきたいですね。マタギの世界は本来、女性もよそ者も入れない世界です。実際、地元の雪山に慣れ親しんだ地元の男性が後継者には向いています。でも、時代や社会の変化に伴い、よそ者や女性も受け入れていかなければ成り立たなくなるだろうという五味沢班の山親方の考えがあり、受け入れてもらえました。女性としての体力差をカバーできるよう、誰よりも早く熊を見つけ、鉄砲を持って熊を追う人たちに熊の位置を的確に誘導できるようになりたいです。そして、山の景色も天候も熊の場所もメンバーも毎回違う状況の中で、熊とどう向き合うかという知恵ややりとりの面白さがある狩猟文化をもっと伝えていきたいです。それから、小国町にはたくさんの手わざがあります。町報でも毎月2面にわたり取材記事が掲載されていますが、そういった伝統文化を無くしてしまうのはあまりに勿体ない。せめて再現できるようにしておきたい。まずは、つる細工にしても何にしても、材料が手に入らなければ作ることもできないので、まだ皆さんが山に行ける今のうちについて行って、材料採りから覚えたいと思っています。

―小国町に学ぶこと感じることは？

小国町には自然の恵みを感じる豊かな暮らしがあります。日々景色が変わり、いろいろな方々から恵みをいただく。美しいな、美味しいな、ありがたいなという素直な気持ちをいつまでも感じられる人間でいたいですね。そんな気持ちすら、意識しないと見逃したり感じられなくなります。ここに生まれ育った方には当たり前でも、本当は当たり前ではない、小国町の暮らしの素晴らしさや魅力を、都会の方だけでなく町の方にも感じてもらいたいと思っています。

それから小国町の方は、物を作ったり直したりすることが得意で、既製品などももう少しこうだったらいいのにと簡単に作り替えてしまうんです。何かの問題にぶつかった時にお金で解決するのではなく、自分の持てる技術や知識、考え方で柔軟に対応していくこと。それができるかできないかでは、生き方として随分変わると思います。今、「生きる力」が大事といいますが、物事に柔軟に対応していく力というのは、小国町の自然や暮らしから学べることだと思うので、子ども達にも伝えていきたいですね。

五味沢班の仲間と紘子さん（左奥）熊狩りは4月から5月頭のブナの葉が芽吹くまでの期間、そのうち実際に熊と勝負できるのは10日間ほどとか

事業報告

11月30日　遊学館
地域学交流集会

地域を知ることからはじまる地域づくり

地域づくりや地域学を実践する方や興味のある方が、お互いの活動を学び合い交流する本集会。「山形学」地域連携講座の仲間を中心に、行政職員や施設職員、教員、学生、市民団体、自治組織関係者など年代や立場も多様な方々にご参加いただき、(一社)とちぎ市民協働研究会代表理事の廣瀬隆人氏のコーディネートで開催しました。

午前の部は、県立酒田光陵高等学校の鈴木和仁校長より、生徒が運営する(一社)SKIES(スカイズ)の取り組みを紹介いただきました。地域を学びの場にすることで生徒も成長でき地域も発展できること、これからの地域づくりには学校も地域も既存の枠や考えに捉われない発想が必要なことを学びました!午後の部は、最初にミニレクチャーとして、地域学などの地域の学びが地域づくりの土台となることの認識や視点の共有をしました。続く実践交流ラウンドテーブルでは、2名の事例提供者と進行役を含む6名グループで活動の広げ方や若い世代との連携の在り方などをじっくり話し合いました。たくさんのヒントやつながりが得られた充実の一日となりました!

様々な業種の方たちとじっくりお話しできる機会はそうないので、よい場となりました。

大人に混ざって話すのが新鮮で楽しかった。全てに納得できるような大人の方々の会話ですごく充実しました。(高校生)

色々な人とつながることができ自分の活動の課題も解決できました。(高校生)

常々、他の団体、他の学校はどうやってうまくいっているのか知ることができなかったので、情報収集や情報共有ができてよかった。

あと一年と少しで、一旦山形を離れてしまうかもしれないけれど、残って活動したいと思えるようなことがたくさんあって、山形は素敵なところだなと思った。(高校生)

◀レクチャーフォーラム
校長先生のほかスカイズの生徒さんも駆けつけてくれました!

実践交流ラウンドテーブル▶
多彩な実践例をじっくりそして和気あいあい学びました!

30年に渡る
山形学の講座録

もっと山形が好きになる! 遊学館ブックス

多彩なテーマで山形の魅力に迫る「山形学」。年度ごとに様々な切り口で講座やフォーラムを開催し、山形の魅力を探ってきました。遊学館ブックスは、そんな山形学の学習成果の深化や拡大を図るため、講座内容をまとめたもの。山形を愛する県民の皆様に、是非ご一読いただきたい書籍シリーズ※です。遊学館・文翔館・洗心庵で販売する他、一部書籍はAmazonや県内の一部書店でもご購入いただけます。まずは、県立図書館内の「山形学」展示コーナーやお近くの図書館で、興味のあるジャンルからお手にとってみてください!

最新刊情報は Check!P8

「山形学」のあゆみ

平成2年	山形の山々　母なる川・最上川
平成3年	花の山形　山形の道
平成4年	味な山形
平成5年	私の「山形学」
平成6年	四季の山形
平成7年	山形の技と心
平成8年	時代をひらく「農」
平成9年	次代をひらく「学び」
平成10年	未来をひらく「扉」
平成11年	環境と私
平成12年	山形を創る
平成13年	県令三島通庸と山形
平成14年	山形の祭り
平成15年	手わざ逍遥
平成16年	「食」彩考
平成17年	水が映し出す山形
平成18年	おもしろ雪学
平成19年	祈りにみる山形
平成20年	もがみ川～記憶と再発見～
平成21年	観る光らす山形
平成22年	地域から世界へ
平成23年	地域学が担うもの
平成24年	音学やまがた
平成25年	食から考える山形
平成26年	老いと死と生
平成27年	時をつむぐ若者たち
平成28年	小説にみる山形
平成29年	山形の生い立ち
平成30年	どっこい方言は生きている
令和元年	みやびとあそびの山形

※平成2～6年度までは新アルカディア叢書というシリーズになります。

ブラタモリの
山形編!?大人気の
『山形の生い立ち』

文学好きには
たまりません!!
『小説にみる山形』

事業報告はホームページでもご覧いただけます。

Information Space

山形県生涯学習センター助成制度のご案内

県民の皆様の多様な生涯学習活動を応援しています！
是非ご活用ください！

助成事業ＨＰ
http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/promotion/

助成事業	青少年地域学習活動支援事業	「山形学」地域連携講座支援事業	地域生涯学習支援事業
対象	高等学校向け	市町村・施設・団体等関係者向け	市町村・施設・団体等関係者向け
特徴	高校の課外活動として行われる地域学習や地域づくり活動を支援します!	地域学や地域づくり活動など地域に関する体系的な講座を支援します!	現代的課題の解決や社会の要請に応じた生涯学習事業を支援します!
募集数	7事業	10事業	10事業
募集期間※	4月1日～6月19日	4月1日～5月15日	
事業実施期間	2020年4月1日～2021年3月31日まで		
助成金額	助成の対象となる経費又は5万円のいずれか低い額	助成対象経費の3分の2（市町村・3年以上継続で助成を受けている団体は2分の1）又は20万円のいずれか低い額	
助成対象経費	謝金・旅費・賃借料・印刷製本費・消耗品費など		

※交付決定事業が募集予定に達しなかった場合は二次募集を行います。

遊学館ブックス最新刊好評発売中！ 一般向け
『どっこい方言は生きている』

平成30年度「山形学」フォーラム・講座の記録集。共通語が普及する中、方言は消えていくのか？「今夜はなまらナイト」の柴田親方をはじめ豪華講師陣が、方言×山形の魅力そして未来を語る、県民必読の一冊！

県生涯学習センター（遊学館３階）・文翔館・洗心庵、八文字屋、戸田書店山形店、宮脇書店天童店、山形大学生協、おいしい山形プラザ（東京都）、Amazonで販売中。お近くの公立図書館でもご覧いただけます。
定価1,100円 B6版 294頁

バックナンバーはこちらからどうぞ！
http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/publication_list/

遊学館からのお知らせ
より魅力ある使いやすい施設へ

２月１日県立図書館リニューアルオープンに合わせ、遊学館はより魅力ある使いやすい施設へ生まれ変わりました。是非ご利用ください。

遊学館ＨＰ

①西側道路沿いに遊学館駐車場40台を開設！
　料金　１時間以内250円、以降30分ごと100円
　割引　入退館時の手続きで割引があります
　時間　９時～ 21時（休館日は終日利用不可）

②第２・第４月曜日も開館します！

③ホール、第１研修室は１年前からの予約が可能に！

④県生涯学習センター、県男女共同参画センター、県立図書館に、県公文書センターと大学コンソーシアムやまがたも加わり、より多彩な複合施設となりました。

⑤カフェレストラン“IL BLU（イルブル）遊学館”もオープン、おしゃれなカフェランチをどうぞ。

※貸館専用ダイヤルを設置しました。
☎０２３－６７６－７１８２（ムニャム ニャ イッパツ）

IL BLU Facebook

編集後記

情報収集や紙面づくりの参考に県内の各市町村報を読み込み始めて２年。お気に入りのコラムや企画は待ち遠しく、もはや趣味になりつつあります（笑）。各市町村で力を入れていること、表現もそれぞれですが、いずれも地域の明るい未来にむけた意気込みを感じ、清々しくなります。本紙もそんな広報紙を目指して頑張ります！（A）

編集発行　（公財）山形県生涯学習文化財団　令和2年3月発行

山形県生涯学習センター　〒990-0041 山形市緑町1-2-36［遊学館］
TEL 023-625-6411　FAX 023-625-6415　E-mail yama@gakushubunka.jp
URL http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/
開館時間　9:00～21:00［夜間利用が無い場合は19:00まで］
休館日　第１・３・５月曜日、第３日曜日、年末年始

洗心庵［山形県生涯学習センター分館］　〒990-0041 山形市緑町1-4-28
TEL 023-664-2800　FAX 023-664-2816
開館時間　9:00～21:00［夜間利用が無い場合は19:00まで］
休館日　毎週月曜日、毎月第3日曜日、年末年始

読者プレゼント

「生涯学習やまがた」をご覧いただいている皆さまに、感謝の気持ちを込めて、抽選で３名様へ遊学館ブックス最新刊『どっこい方言は生きている』（2月発売1,100円）をプレゼント！左記の山形県生涯学習センター広報紙担当あてに【①お名前・ご住所②入手場所③興味を持たれた記事④内容についてのご感想・ご意見・ご要望】を添えて、はがき・メール・ＦＡＸでご応募ください！締め切りは4月末です。